

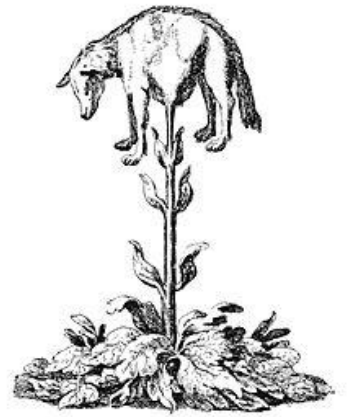
活動分野	森に親しむ講座		
タイトル	木綿と藍染の文化史～庶民は何を着ていたか		
実施日時	平成30年10月25日(木) 9時30分～11時30分		
実施場所	千葉市文化センター		
受講者	31名	FIC会員他スタッフ	9名

活動の内容

冒頭、会場壁面に展示した講師作成の藍染め作品など紹介。スライドによる講義では日本の庶民は江戸時代初期から木綿を着たこと、木綿以前は苧麻(カラムシ)・大麻、芭蕉(沖縄 芭蕉布)、オヒョウ(アイヌ・アットウシ織)、シナノキ(羽越科布)、カシノキ(白石紙布)、クズ(掛川葛布)、フジ(藤布)、コウゾ(太布)などを着ていたことを説明。

さらに木綿と麻の違い、糸つむぎの方法を説明。江戸時代にワタ栽培普及後、実綿生産から織布・晒加工などが専門化して分業が進み、更に周辺産業が発展することで日本経済は自給自足から商品経済へ大転換し、木綿が日本近代化の基軸となったが、明治時代に綿輸入自由化により国産木綿は消滅したことなど解説。

後半では、藍染の歴史や藍染め衣料の特徴、藍染め技法、藍染の基であるタデアイの種を希望者に配り、育て方や利用法を説明して終了。



伝説の植物バロメツ



木綿糸つむぎ



綿の実



日本最古の藍染め 縹の妻



藍染作品の説明



藍染型紙の説明